



母親，子供たちに伝えたい 放射線教育について—消費者教育の視点から—

石窪 奈穂美
Ishikubo Nahomi

はじめに

2013年11月14日に開催された平成25年度放射線取扱部会年次大会シンポジウム「母親，子供たちに伝えたい放射線教育」に，筆者は4名の放射線の専門家の方々とともに進行役として参加させていただいた。筆者自身は，放射線の専門家でもなく，普段は大学で消費者教育に携わっている。“母親，子供たちに対して，女性の視点で放射線教育を語ってもらおう”という趣旨で企画された今回のシンポジウムは，消費者教育と関係する部分もあり，大変興味深かった。東日本大震災時に発生した福島第一原子力発電所事故後の混乱や風評も含めて不安に繋がる情報が今も続く中，発表者のそれぞれの立場からの放射線に関する理解活動は，分かりやすい説明や細やかな対応など対象者に寄り添う形で根気強く進められていることに感銘を受けた次第である。消費者教育でも消費生活に関わる面から，放射線についても少しではあるが，触れている。そこで，本稿では消費者教育について少し紹介をする。

1. 消費者教育とは

消費者問題は広範に拡大しており，食の安全や商品・サービスに関わる問題などと同じく環境・エネルギー問題も消費者にとっての身近な問題の1つとして捉えられている。また，消費者教育は知識・情報のインプットで終わるもの（消費者情報）ではなく，それらをインプットして責任が持てる意思決定ができる能力を養うこ

と，つまり意思決定のプロセスの教育であるといわれている。ものの見方や考え方を学ぶことで，数多くの溢れる情報の中から自ら判断し行動できるような消費者力を身に付け，自分の選択に責任を持てる賢く自立した消費者になれることを目標にしている。視点として，常に“定性と定量”の考え方をもち，批判的かつ客観的に問題を捉えることができるように，教育者側は多面的に題材を提供することを意識している。

2. 連携の必要性

いま，学校現場に限らず，“〇〇教育が必要”と多くの分野で提唱されているが，重要性は感じつつも，分野ごとの単一のアプローチでは時間的にも全てを網羅するのは難しい状況である。ある意味人間力を付けるという出口はほぼ同じのように思えるが，入り口が混雑している感が否めない。分野間の情報交換や連携がますます重要であり，意外なコラボレーションから成果が生まれることも考えられる。

3. 魚の獲り方を学ぶ，教える

米国の消費者教育ガイドラインのまえがきには，東洋の諺を引用して，「もし，あなたが人に魚を一匹与えるならば，彼はたった一食分を得るにすぎない。もし，あなたが彼に魚の獲り方を教えたなら，彼は一生食えることができる。」と書かれている。微力ながら，魚の獲り方に繋がるような教育を心掛けていきたい。

（消費生活アドバイザー・鹿児島大学非常勤講師）